

て、にわか盲の悲しさに、あつちの溝にはまり込み、こつちの堀につき当たり、叶わぬことの数ありて、世のはかなさを知るうちに、この天地に生を得し、五尺の丈けの一芸と、阿呆鳥は鳶をまね、ピーヒョロヒョロの笛流し、按摩上下十六文。

この業に甲斐を得て、幸多き人の世に、我も生きなん願いの冷たさを、見知らぬ宿の鉢の木に、花の朝のひもじさを、春告鳥の音に忘れ、若葉の風は空しくも、月の朧ははかなくも、行く雁がねの遠くして、笛の調べの近ければ、今日一日の生き死にを、煩うことはなかりけり。

逝く歳月はやまずして、此の世の旅の長ければ、瞼の裏に焼きつきし、故郷の山河変らねど、人の姿は消え失せて、辿りつきたるこの関に、行き交う者は言葉なく、伴れそう者の影はなく、雪大木戸を擁すとも、雲は伏せ屋を閉せども、いたわる杖に力えて、笛の細音を聞く人の、心ぬくもる旨酒に行くも帰るも逢坂の、知るも知らぬも関こえて、京に上りて検校の、位を獲んと発心す。

腰の路銀の重くして、四谷の谷の深くして、またその坂の長ければ、ここを塙に永住みて、愛住みなれし幾年を、昨日は南今日は北、左ききなる左門町、酒の肴の塩町や、その伊賀町忍び足、街角多き辻々に、道陸神の招きをば、今日か明日かと待ちわびて、人の情の内藤町、何の縁か知らねども、大黒様のお導びき、今日この宿に招かれて、心うれしき木曾

の香の、久しぶりなる懐しき、つい気安さのあまりにて、幼き頃の思い出や、若き命の流離を思わず知らず語りかけ、独りよがりの長談義、……。

有由有縁

按摩の話がここまで来ると、庄右衛門は寝返りをうって目をあげ「寒い」と云う。按摩はいい潮時を捉えて話を打ち切る心構えをしていたのだが、つい口が滑ったふうで、「寒いのは酔が醒めたせいもござんしょうが、こんなに胃の腑が無一文じゃあ、旦那、身体がもちませんや」と、親指で胃の裏側を探るように圧して、「鳶がさらう油揚げというものが身体に力をつけることは御承知でしょうが、それより何より身体が



川端康成氏の書

ぬくもるものは赤犬の肉でござんす。つい先頃、犬の肉鍋屋が荒木横丁に店を開き、手前もさいせん寄って見ました。按摩と犬は敵同志、不倶戴天の敵の肉で、これこの通りぬくぬ



くと顔がほてり……」と云って、犬鍋の効能について庄右衛門に語りかけたが、どうしたものか、「それで」と、云ったま

ま口ごもり、考えこんでしまった。

四代將軍家綱の弟綱吉(犬公方)が五代を嗣ぎ、生類憐れみを出して犬を保護したのは、これからまだ三十年あまり後の貞享四年であるから、承応の時代はまだ犬狩りは自由であったであろうが、仏教の影響で一般の人達は四つ足を忌避していた。

ところが、玉川上水の人足たちは、四谷界隈で狼藉を働らくばかりでなく、四つ足を食えばお足がふえるという粋な迷信にもかられて、夜な夜な捕り繩を腰にして各地に神出鬼没野良犬を蒐めて来てはこれを煮て食っていた。調理の中で一番人気の集まったのは生姜味噌の煮込みで、彼等はこれをへわだつみ鍋と称して、鍋を車座にかこみ、あぶくを掻き廻しながら、うまいうまいと腹鼓を打っていた。

この犬狩隊の隊長格の男が、これを商売にすれば繁昌間違いなしと、へあすなろ家」という屋号の店を構えたのが犬鍋屋の元祖となった。上水工事の人足頭であった彼は、手下が蒐めた犬を撲殺して店にあてがい、客扱いの方はいっさい女房に委せていた。

荒木横町の露路奥九尺二間の素人家を改造したあすなろ家は、玉川上水の人足達の溜り場となっていて、むさ苦しい土間にいくつかの七輪が並べてあって、そのまわりに空き樽の腰かけが置いてある。

開店披露中のこの店の片隅に、一人の按摩が腰を卸して、

鍋をつつついていたが、燭を持って来たお内儀に、世辞ともつかぬふうには、「味もいいが、檜の箸の香りが何とも云えぬ、久しぶりに木曾へ帰ったような気がするぞ」と云った。

すると、お内儀がしげしげと按摩の顔を覗きこみ、「まさか木挽のソレ……若い衆の猫八さんじゃなからう、かね」と云う。その問いかけに按摩は下を向いたまま黙考していたが、ややあつて、読めたという表情で、「お鶴ちゃん、全く久しぶりだった、ね」という。

犬侍の血刀

観音堂での丑の刻の別れ以来、お鶴と再び逢うことがあろうとは夢にも思わなかった按摩は、木曾を抜け出て来た後も、季節外れの生暖かい野分が吹くと、お鶴幽霊を思い起して、かりがねの便りにも托して、詫びの一つも云いたい気分になることもあった。お鶴の方もあんなことがあって、お参りの御利益がフイになって、父は一命を失ったが、これも猫八の了見のためではない、江戸へ出たら何かの拍子に顔を合わせることもある。その時には人の世の不思議な絆をたぐり寄せ、今は亡い父とのもつれ合をもきれいさっぱりと水に流すことができようと思うこともあった。が、いま目の前に年を経た旨の何気ない風体に接してみると、此の世のしがらみから、いまだに足が抜けずに、犬侍の錆び刀に後生を托している自分の夫の姿にあわれがつのる気がして、お鶴は急ぎ込んで

してやる」という。こんな因果があの人につき纏って、いまだに眼が開かない。これが闇魔に眼を抜かれた餓飢畜生というものでしょう、と云う。

按摩は自分の目頭をさすり、腹の金包みに手をやって確かめ、何か云い出しそうな素ぶりだったが、一本指をお鶴に示して、酒を所望した。その時、裏手に犬のわめき声がわかたに湧き立ち、一人の男が血刀をさげてノツと這入って来た。お鶴は按摩のふところにそつとお捻りを押し込み、「有り難うございます」と、追いつく様に表に送り出した。

鉛色の空から、雪がしきりと降り、按摩の首筋から舞いこんでは背筋で溶けた。二の字の下駄の跡が闇の大木戸の方へと続いて行き、笛の音が黒屋のあたりで、ポツリと止んだ。

湯屋横丁

さて、揉み終った按摩が、敷居際にいざり、庄右衛門がこれに金子を投げ与えて、按摩がこれ押し戴いて立ち上ろうとする、障子が開いて弟の清右衛門が入って来た。ぬれ鼠のように濡れそぼち、着物の裾から雫がたれている。

「川にでも落ちたのか」と、問う兄に、弟はこう語った。その話を補足すると――

春以来、兄弟が力をあわせて高井戸まで掘り上げてきた素掘りが秋の豪雨で押し流されてしまい、工事継続の追加金を幕府に願ひ出たところ、当初の工程の実現をみるまでは、追

だ調子で三昔前からの来し方をこんなふうには語り聞かせるのだった。

妾は兵頭の一人娘で、父が尾張から木曾へ廻った頃、母を喪い、母のいない家を切りもりしていたが、父のお仕置き後は、身寄りがないので独り暮らしをしていた。父の配下で父と仲間を代官に売り、代官の娘のお美代に近づくとした梅林藤四郎は、人柄の悪さを代官に見抜かれて、代官屋敷から追い出されて、事もあろうに妾のところに来て、夫婦になつてくれと云い寄るのであった。父を陥し入れた藤四郎とは仇敵の間柄である妾が、どうして一緒になつたかは、恋は思案の外という言葉で理解して貰うより仕方ない。藤四郎の妻になつた妾は、三つ子の魂百までも、飲む打つ買うの三拍子揃った男と共に、木曾を食いつめて江戸へ流れて来たが、六十年の不作といわれる半分を貧乏のしずめで過して来た。

尾張様のお屋敷続きの荒木横丁に知り合いを頼って暮しているうちに、運というものが向いて来たのか、今年の春、夫は玉川御上水の人足頭に取り立てられ、夫はその方で稼ぎ、妾はこの方だと、お鶴は銚子の底を揺すって酌するのである。

そして小声で、こんな因果な商売でも生きてく道には変りはなく、どなたに遠慮はないけれど、いまだに夫が酔いでもすると、「木挽のところは代官の娘・お美代に大金を届けさせた。それを猫八が猫ばばきめて江戸へ逐電しおった。八百八丁の溝板をはがしても、あの糞猫を探し出し、金を取り返

加金はまかりならぬとの達しで、自力で金融の道を開拓しつつあった庄右衛門は、先祖伝来の田畑を悉く売り払い、更に女房の里方の所有であった芝口の屋敷も換金して、それまでの支払いに充てていた。

弟の言い分は、「玉川御上水は將軍家の直轄工事で、豪雨による天災の被害は当然お上が負うべきものである。追加金の支払があるまでは工事は停止すべきである」と、いうのである。これに対して兄は、「理くつはそうであっても、この場合はそういうわけにはいかない。將軍家の御用を承るだけでも家門の名譽である。まして上水完成の晩に、八百八丁の水不足が解消し、莫大な財産を烏有に帰しつつある江戸の華が防止できるならば、我が家の財産の一つや二つが失われても、決して惜しくはない」と、いうのである。

兄弟の意見がこんな具合に対立したまま暮を迎え、木挽、大工、石工、土工などの賃銀の支払いにまつていた庄右衛門は全く頭が痛かった。彼のところには毎日これらの代表が押かけ、越年資金の支払を迫っていた。今朝ほとんど木挽の仕事場を見廻っていた庄右衛門に、支払を強要した彼等が大鋸屑を投げかけた。庄右衛門は今晩もこれら招かざる客の来訪を予期していた。

兄の意見と反対の立場をとる弟清右衛門も、従業者の困窮を目のあたり見ては、じつとしては居られず、今日も朝から各方面の高利貸を訪問して金策に努めたが、何ほどの金も借

りられず、最後に湯屋横丁の安井屋にむしんを言いに出向いた。主人不在で彼が安井屋の店を出ると、店先で団体交渉の連中につきまわり、つるし上げをくつっていたが、双方の語気が高調し、激怒した労働者が清右衛門の頭から湯を浴せかけた。残念ながら多勢に無勢、下手人は取り逃してしまった、というのである。これが湯屋横丁事件の荒筋である。

小判百両

去りやらず側に控えてこの話をジツと聞いていた按摩が、いたく感無量の面持ちで威儀を正して云うよう、「愚生いささかの御縁にて今夕この場に罷り出で、お話の始終を聞き及び申し、まことに感慨深いものが御座います。国を出てから三十年、その折思いがけず入手いたしましたる仏の路銀、肌身はなさず永年温めつばなし、まさか虱の餌食にはなっていない苦」と、胴巻きから金包を取り出して庄右衛門の前に置き、更に語を継いで、「久しい按摩稼業の足を洗い、京に上りて検校の位を獲んものと心掛けてはおりましたものの、三途の川の渡し銭にも事欠かぬ今日、この上、栄爵の重荷を求めて催促と、もがいてみても同じこと、手足纏いの厄介荷、さらりと捨てて大川で、ケツを洗ってさっぱりと、そんな気分になりました。おはずかしき額には御座いますが、めくらの分際にて、などとお咎めなく、気安く御用にお使い下さいまし」と、云って立ち上った。

終を言上した上、「この座頭を検校に取り立てて頂きたい」と願い上げた。感慨深げに耳を傾けていた家綱は、「殊勝な者



江戸近郊八景小金井橋夕照（広重集より）

庄右衛門は威儀を正し、「どこの御仁か定かに知らず、お言葉に甘え申す訳には参りませぬ」と、押し戻したが、按摩はこれを受けず、「有る時払いの催促なして、担保は玉川のお水でござる」と、朗らかな顔つきで女中に手をとられて階段を下った。弟清右衛門がこれを追って、「お名前だけでも」と、せまると、「坂丁に住む按摩」と答えて、雪の街に消えて行った。庄右衛門が紙包を開いてみると、大小あわせて百両の小判が出てきた。彼ははずれ他日按摩を招き、利息、返済期限などの取り極めをして、改めて証文を手渡したいと思ったが、それ以来この按摩は大木戸界隈に姿を見せることがなかった。

明 暗

翌承応三年（一六五四）夏六月、清冽な水はこんこんと江戸に湧き、府内の住民は上下を挙げて歓喜し、三日に亘って盛大な祝祭が催おされた。四谷界隈の町民は水道工事に協力したというので、特に大通りの左右に分水を許され、一ヶ町五箇所の割で水請井戸を設けられた。兄弟兩名はこの功により、玉川の姓を賜わり、帯刀を許されて、禄二百石を下賜された。後年、上水役を命ぜられ、水賦金の取り立てを委任され、子孫は継いでその職にあったということである。

その論功行賞の日、將軍家綱の前に召し出された庄右衛門と清右衛門に、「何か他にのぞみがあるか」との下問があった。庄右衛門は、「畏れながら……」と前置きして、按摩の一部始終を語り、嘉賞の言葉を洩らし、即刻この座頭を探し出すようにと、奉行に下命した。江戸町奉行あげての大捜索にもかかわらず、四谷坂丁はおろか、府中にその按摩の影は見出せなかった。

あとがき

幕府は玉川上水が開鑿されてから十六年目の寛文十年（一六七〇）に、上水の流れを町年寄（奈良屋市右衛門、樽屋藤左衛門、喜多村彦兵衛）の支配に委せた。この時、従来一間巾だった水路を巾三間に掘りひろげ、水路の両岸に三間巾の土堤を作り、南側を喜多村彦兵衛に、北側を奈良屋市右衛門に与えた。この町年寄兩名はその土堤に、自費をもって松と杉の苗を植え、沿岸の住民が塵芥などを投げ入れないように美化地帯を作り、高札などを立てて住民の協力を要請した。小金井の桜として今日も名所となっている上水堤の桜の最初の植樹年代は、この時代から更に六、七十年後の元文年間（一七三六—一七四〇）頃と推定されている。

ここに掲げた「小金井橋夕照」は、更に下つて安藤広重（一七九七—一八五七）の筆になるものであるから、この桜の樹令は凡そ百年に近いものと見られる。新編武蔵風土記稿によれば「上水通り小金井橋上下、兩岸ノ桜樹数百株、凡二里許ノ間ニ亘レリ。是ハ川崎平右衛門定孝ノ栽ユル所ナリト云フ。花時ノ盛ナル都鄙ノ人々遊賞スルモノ路ニ相ツヅケリ」とある。



広重画・「名所江戸百景・玉川堤の花」

小金井からの流れが新宿にいたり、追分から今の新宿御苑の堀沿いに、四谷大木戸に流れ着くところの手前の川堤にも、桜が植えられ、その並木道があった。広重による「名所江戸百景・玉川堤の花」と題されたものは、そのあたりの風景である。この図の流れは先方が上流で、手前が下流となっている。従って、桜並木の左手は信州高遠の城主・内藤氏の屋敷（今の新宿御苑）であり、川の右手は新宿の遊廓で、遊女屋が軒を連ねている。

今から二十数年前、承応を隔たること三百余年の歳末。師走の東京の街には風花が散っていた。私は地下鉄丸の内線工事でせわしい四谷大通りから、昔、おかりや横丁とよばれた路地にまがり、急ぎ足で、坂町の我が家へ戻って来ると、飯場の庭に、古材が折り重なって積み立てている異様な風景に出会った。二人の夫婦が、悪臭を放つ泥だらけの朽材に、薪割りを振って挑んでいる。こなされた薪の傍らで、控えの二人が焚火に余念がない、

「寒いね」と云って、私も焚火の仲間になった。「これは、一体何だね？」と訊くと、彼等は、「そつたらこたアわかねえじゃなあ、聞いたベエ、江戸ズだいの水道管、へてだよなア。ツぶんダつのスこと場から、こつたらもんが出はって来て、風呂屋サくれベエと、へつたが、みなおごとわりくらって、貰い手もねえ、捨て場もねえ。への木はだめだア、ゆんぶくてだめだア、しんでえもんなア」と云い合うのである。焚火の煙からは、たしかに尾州（木曾檜）の匂いが嗅ぎとれるのである。

そこに現場主任があらわれて、「早いとこやつけないと、あとゾクゾクと出るぞ、気合を入れて、精を出してくれよ、なあ」と云う。私はこの主任に、「これと同じ石数の薪と交換してくれませんか」と云うと、「薪なぞとんでもない、只であげるから、全部、これから出る分も、責任をもって片付けて下さいよ」との返事である。この四谷出土の分は、本文中の、大木戸から江戸城へ引き込んだもので、尾州材を厚板に挽き、箱に造つたものである。その後、桜田門周辺から出土したものを大量に確保した。この分は井伊家など武家屋敷へ配水したもので、前のものから見れば時代もくんだり、箱管ではなく一本の凹字彫りである。材は地の檜と松、時には

栗もある。

さて、江戸城の水道余水は、大手門から出て日本橋方面まで流れ、この方面の町民を潤おした。その尻は三十間堀へでも流れ込んだものである。また、水道橋は本文冒頭に記した初代家康の開設で、玉川上水とは別の水系の神田上水にゆかりの名称である。そして、玉川高島屋ショッピングセンターは、多摩川の下流の二子橋にある。かつ吉三店（日本橋、水道橋、玉川）の所在は、奇しくも、すべて水道に縁あるところとなっている。

「担保は玉川のお水でござる」と云って消えた坂丁の按摩が、抵当権の行使を留保したまま、坂町に住んでいた私に、三百年後に水道材をかたづけさせるとは、何か由縁がありそうである。そんなご縁で、かつ吉三店の内装は水道材を使った。

さて、江戸初期から土中に埋没していたこの材の芽生えに思いを及ぼすならば、伐採の時に二百年生とすれば、今から五百年前、ちょうど応仁の乱時代に生えたことになる。ともかく「へのきは、ゆんぶくて、しんでえもんで、俺あ助かっただア」と、つくづく檜の思いと同じような感慨にふける次第である。また、暗渠の蓋石は玉川高島屋東館「菩提樹」の入り口の植込みに配してある。

陸舟水屋

丁未塗月
吳俊卿

陸舟水屋。近代中国の代表作家吳昌碩（一八四四—一九二七）の作。吳昌碩（名、俊卿）は周代の石鼓文などの研究に一生をささげた。陸舟と水屋は水道の水に関係が深い言葉なので、「水道橋かつ吉」の開店の時に山水楼主人宮田氏より贈られ、これを双鈎して入口の水道材に彫りつけ装飾とした。

陸の舟とは砂漠を行く駱駝のことであるが、吳昌碩のこの言葉はそれを指してはいない。陸に上つた舟と、水の中の屋とは、ともに役に立たない無用の長物である。それは、無用であり不要であり、邪魔物でありながら、人々が何と云わうと、あとに退かず、その社会的存在意義を自認し、固執し、それを主張しつづける愚公的な頑物である。いわゆる、ありきたりの小乗の合理性を無視し、これから逸脱して大乘的自覚に根を措え、無限の可能性を信ずる実体ともうけとれる。それは、「流れに枕し、石に漱ぐ」という、夏目漱石の如き負けおしみの強い男の心情をあらわしたものと私はとる。

ともかく、私は、このつむじ曲がりの臍まがりの篆書の額を玉川の「菩提樹」に懸けた。そして、台風〇〇号が大菩薩の嶺を溶かし、よし、多摩川の兩岸が水浸しになろうとも、一人の人命をも失わないように、神仏に祈ってやまない次第である。

松平為磨

